



『名所江戸百景 市中繁栄七夕祭』 / 歌川広重 (初代) 安政4年 1857

江戸の七夕風俗を描いた作品です。七月七日の前日未明から家々の屋根に高く七夕竹を立てる習わしがあり、町には笹竹売りの声が響きました。竹には短冊のほか、瓢箪や西瓜、大福帳など多彩な飾りが掛けられ、夕方には川や海へ流されました。わずか一日だけ江戸の町を彩った華やかな行事の様子が生き生きと表されています。

花かがみ

HANA-KAGAMI

発行人/小笠原 誓 発行所/名古屋園芸株式会社
〒460-0005 名古屋市中区東様2-18-13 tel.052-931-8701
http://nagoyaengei.co.jp/

'26 6

石木屋園芸

父の日の贈りもの



シェードコンテナの楽しみ方

日陰では植物が育ちにくい、花が付きにくいというイメージを持たれがちですが、実は日陰ならではの植物の魅力があります。

冬は種類が少ないものの、6月から夏に向けて気温が高くなる今の時期は、日陰で美しく育つ植物が豊富に出そろいます。花だけでなく、ギボウシやフウチソウといったカラーリーフも日陰で十分に楽しめます。

ペゴニア、インパチェンス、トレニア・カタリーナシリーズは、日陰で抜群のパフォーマンスを発揮する代表的な植物です。逆に、これらの植物は夏の西日が強く当たる場所では育ちにくく、花付きが悪くなったり葉が焼けたりします。

日陰を明るく、美しく見せてくれる植物たち。この季節なら、北側に面したマンションの玄関先などでも十分に楽しめます。日陰だからこそ作れるシェードガーデンを楽しんでみましょう。

もうひとつ大切なポイントがあります。近年の気候を考えると、これから名古屋には灼熱の夏がやってきます。これまで「夏の日差しが大好き」とされてきた植物でも、人と同じように暑すぎる環境は苦手です。真夏のイメージが強いハイビスカスでさえ、気温が35℃を超えると花が咲きにくくなります。そのため、7月・8月は少し日陰に移してあげた方が株にとって良い環境になります。

これまでの育て方を見直す必要が出てきている今、これからの夏は「日陰」が植物を育てるうえで重要なキーワードになりそうです。



ペゴニアセンパフローレンスとカラーリーフの寄せ植え
シンプルな寄せ植えが長く楽しむためのポイント。



アジサイのアレンジメント「芒種」 ¥7,000 (税込 ¥7,700)

淡いパープルを基調にまとめたブーケは、涼やかで落ち着いた印象を演出し、初夏の空気感をそのまま閉じ込めたような仕上がりに。

やさしく移ろう色合いは、梅雨のしっとりとした情景にもよくなじみ、飾る空間に穏やかな時間をもたらしめます。大切な方への感謝や、さりげない心遣いを伝える季節のギフトとして、日常にそっと彩りを添えてみてはいかがでしょうか。ご自宅用としても、季節を感じるインテリアの一つとしておすすめします。



季節のバースデーギフト

— 二十四節気に寄せて —

6月は、二十四節気という「芒種」から「夏至」へと移ろう、生命の息吹が満ちる季節です。

雨に濡れて美しさを増すアジサイは、この時期ならではの風情を映し出し、見る人の心に静かな潤いを届けてくれます。そこにやわらかな花姿のトルコキキョウを添えることで、上品な華やかさが加わり、贈り物としての存在感が一層引き立ちます。



アジサイのブーケ「夏至」 ¥7,000 (税込 ¥7,700)

information

プランツ・コレクション
「食虫植物」コレクション

開催期間：6月6日(土)～7月19日(日)
(*日程は予告なく変更する場合がございます。ご了承くださいませ。)

食虫植物とはその名の通り「虫を捕食する植物」の総称です。ユニークな仕組みで昆虫を捕食し生命を維持しています。捕虫葉(ほちゅうよう)と呼ばれる葉が異なり、その方法は種類によって実に様々です。

見た目も不思議で美しい食虫植物を、この機会に展示即売します。代表的なハエトリソウやウツボカズラなど、一年の中でもこの時期が最も多くの種類が出そろいます。ぜひこの機会に食虫植物の世界をのぞいてみてください。その戦略的な生態と美しさに魅了されますよ♪



ネベンテス アラータ ウツボカズラの代表的な品種で、コンパクトで育てやすいです。



江戸では七夕が町人文化の中で大いに楽しまれ、屋根の上に高く掲げられた笹竹が風に揺れ、通りを彩る華やかな光景が広がりました。寺院では七夕に合わせて立花が供えられ、人々は二つの星に願いを託しながら夏の行事を楽しみました。一方、大奥では庭の水辺に飾りをつらえ、五色の糸を渡した竹に短冊が揺れる、気品ある七夕が営まれ、静かな水面に映る飾りが優雅さを添えました。

旧暦七月は立秋にあたり、芒が出穂し、撫子や女郎花など秋の七草が咲き始める季節です。七夕には豊稔を祈る予祝の意味も込められ、星祭でありながら植物祭でもありました。いけばなでは秋の七草を組み合わせた「七夕七種」が特別な生花としていけられ、京都の池坊では七夕の花会が開かれ、季節の美を寿ぐ風雅な世界が広がっていました。京都洛中洛外の名庭園図説である、『都林泉名勝図会』に描かれています。

七夕は奈良時代に中国から伝わり、旧暦七月七日、現在の八月頃に行われた初秋の行事です。人々は草木に神々の気配を感じ、願いを植物に託してきました。まっすぐ天へ伸びる笹竹は願いを天へ届ける象徴とされ、葉擦れの音は「神を招く音」と信じられ、湿度の多い季節でも腐りにくい竹は生活の知恵としても重宝されました。

江戸では七夕が町人文化の中で大いに楽しまれ、屋根の上に高く掲げられた笹竹が風に揺れ、通りを彩る華やかな光景が広がりました。寺院では七夕に合わせて立花が供えられ、人々は二つの星に願いを託しながら夏の行事を楽しみました。一方、大奥では庭の水辺に飾りをつらえ、五色の糸を渡した竹に短冊が揺れる、気品ある七夕が営まれ、静かな水面に映る飾りが優雅さを添えました。

花の博物館 第365回

みやこりんせんめいしょうずえ
『都林泉名勝図会』

京都の池坊では七夕の花会

秋里籬島(籬島軒秋里) 寛政11年 1799

小笠原 誓